

2024 年 4 月

# 食料安全保障月報

## (第 34 号)



令和 6 年 4 月 30 日

**農林水産省**

# 食料安全保障月報について

## 1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供を目的で作成しています。

## 2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

## 3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報(生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等)について重点的に記載しています。

## 4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

# 2024年4月食料安全保障月報（第34号）

## 目次

### 概要編

I	2024年4月の主な動き	1
II	2024年4月の穀物等の国際価格の動向	5
III	2023/24年度の穀物需給（予測）のポイント	5
IV	2023/24年度の油糧種子需給（予測）のポイント	5
V	今月の注目情報「米国とブラジルの輸出競争」	6

### （資料）

1	穀物等の国際価格の動向	1 2
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 3
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	1 4
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	1 6
5	食品小売価格の動向	2 0
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	2 1
7	FAO 食料価格指数	2 3

### 今月のコラム

	「ブラジル便り②：ブラジルの輸送インフラ」	2 4
--	-----------------------	-----

### 品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	<米国>	2024/25年度の小麦の作付意向面積は前年度比4.2%減少
	<カナダ>	2024/25年度の生産量は前年度比8.3%増の34.6百万トン
	<豪州>	2023/24年度の輸出量はアジア向けの輸出が好調で0.5百万トン上方修正
	<EU27>	2023/24年度の輸入量は史上最高の13.5百万トン
	<中国>	2024/25年度の冬小麦の生育は概ね順調
	<ロシア>	2023/24年度の輸出量は史上最高の52.0百万トン
	<ウクライナ>	2023/24年度の輸出量は前月予測から1.5百万トン上方修正
2	とうもろこし	9
	<米国>	2024/25年度の作付意向面積は、前年度より4.9%減
	<ブラジル>	2023/24年度は高温乾燥により減少
	<アルゼンチン>	2023/24年度は、前年度から回復する見通し
	<中国>	単収及び収穫面積の増加を受け、生産量は史上最高
	<ウクライナ>	2023/24年度は、侵攻前の2021/22年度より29.9%減
3	コメ	1 5
	<米国>	2024/25年度の作付面積はわずかに増加の見込み

- <インド> ラビ米の収穫が開始
- <中国> 東部から南部の早稲の生育は平年より早く良好
- <タイ> 乾季米は灌漑用水不足や高温等から減産見込み
- <ベトナム> 南部メコンデルタ地域の冬春作(乾季米)は海水侵入で生産量減少

## II 油糧種子

- 大豆・・ 21
- <米国> 2024/25年度の作付意向面積は、前年度より3.5%増
- <ブラジル> 2023/24年度の生産量(CONAB)は前年度より5.2%減
- <アルゼンチン> 2023/24年度の生産量は、前年度より倍増
- <中国> 2023/24年度の生産量・消費量・輸入量は史上最高
- <カナダ> 2024/25年度の生産量は6.9百万トンの見込み(AAFC)

- (参考1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について(2023/24年度)・・・ 27
- (参考2) 単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
- (参考3) 各国のクロップカレンダー一覧(主要品目毎)・・・・・・・・ 28

### 今月の特別分析トピック

「我が国と世界の油脂をめぐる動向」

#### 【利用上の注意】

表紙写真：ブラジルの順調に生長するとうもろこし(マトグロッソ州 2024年3月31日) 天候に恵まれ作柄は良好。

(概要編)

## I 2024年4月の主な動き

### 主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の2023/24年度の作況について、北半球では収穫が終了した一方、南半球では生育期から収穫期を迎えている。同時に、北半球では2024/25年度の春作物作付けが始まっている。

品目別にみると、4月の米国農務省（USDA）の需給報告によれば、小麦については、前年度高温乾燥の影響を受けたインドや米国等で増産となるものの、前年度史上最高の豊作だった豪州等で減産となり、世界の生産量は前年度を下回る見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、2022年3月に過去最高を更新した小麦の国際相場は侵攻時の水準を下回ったものの、ウクライナの穀物輸出に関する4者合意については2023年7月にロシアが離脱し停止。現在、黒海の臨時回廊からの輸出が順調に機能しているものの、EU経由での代替輸出の進捗も含め注視が必要。

とうもろこしについては、ブラジル等で減産見通しであるものの、米国や中国で史上最高の生産量となり、世界の生産量は前年度を上回る見通し。大豆については、ブラジルや米国で減産見通しとなるものの、今後収穫期を迎えるアルゼンチンで増産見通しとなり、世界全体の生産量は前年度を上回る見通し。いずれの品目も、旺盛な消費により期末在庫は依然としてタイトな状況の中で、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数については、植物油の上昇等により、2月の117.0から、3月(最新値)は118.3に上昇（参考：2023年3月128.2、2022年3月159.7、2021年2月119.2、2020年2月95.2）。海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近5カ年の平均値と同程度の水準で推移。

### 早期注意段階の継続について

緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2021年7月に、主要輸入農産物の国際価格や海上運賃の上昇、国際的な物流の遅れ等の当時の状況を踏まえて適用。2024年4月も引き続き適用した一方で、主要穀物等の国際相場や海上運賃についてはここ最近下落傾向で推移しており、引き続きその動向に留意。

【参考】早期注意段階について（農林水産省HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/ampo/soukichuui.html>



## ウクライナの生産・輸出動向

米国農務省（USDA）の4月見通しによれば、2023/24年度の小麦は収穫が終了し、生産量は前月から変更なく2,340万トン（対前年度比9%増）。とうもろこしも収穫が終了し、生産量は前月から変更なく2,950万トン（同9%増）。輸出量は黒海沿岸を通過する臨時回廊からの輸出が増加していることもあり、小麦は前月から上方修正され1,750万トン（同2%増）、とうもろこしは前月から変更なく2,450万トン（同10%減）（参考1）。

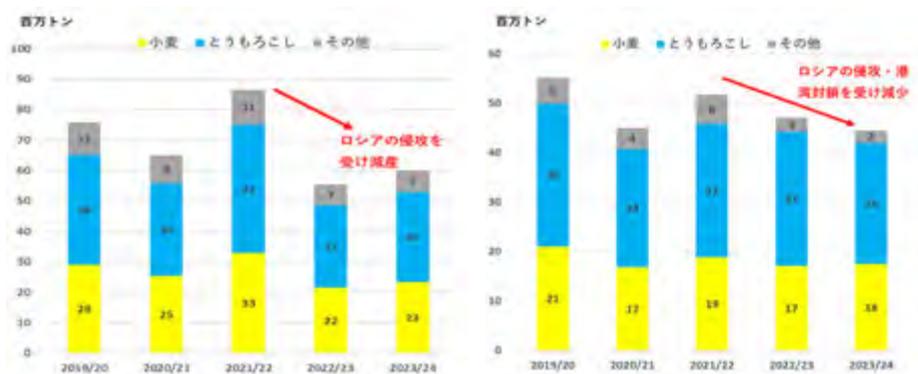
ウクライナ農業政策食料省によれば、2024年産の春作物の作付けが開始された。4月11日時点で春小麦は17万4千ヘクタール作付けされ、作付進捗率は71%（前年同期75%）、とうもろこしは12万ヘクタール作付けされ、作付進捗率は3%（前年同期1%）となっている。

## 臨時回廊からの輸出増

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（黒海穀物イニシアティブ）により、穀物等3,283万トンが輸出されたが、2023年7月17日にロシアの離脱で履行が停止。

一方、代替輸出ルートとして、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する臨時回廊からの輸出や、運河等を利用しルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出が行われている。代替輸出ルートのうち、EU域内を経由した輸出量は減少傾向にある一方、臨時回廊からの輸出量は前年10月以降伸びているが、ロシアの侵攻や中東情勢の影響等について今後とも注視が必要（参考2）。

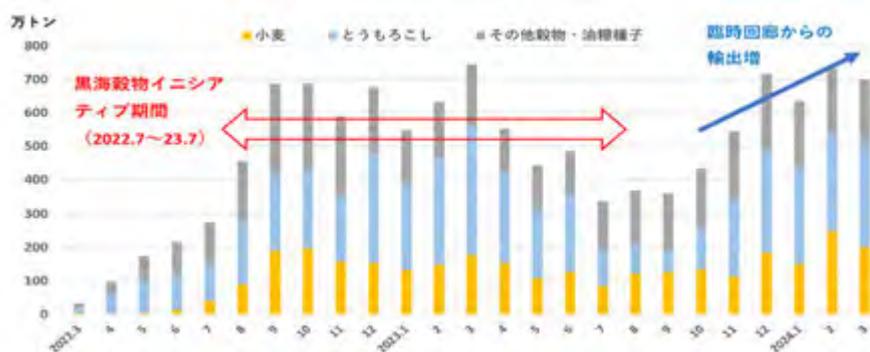
（参考1）小麦ととうもろこしの生産量(左)、輸出量(右)の推移（年度）



出典：米国農務省「PS&D」（2024.4）

注：その他は他の穀物（大麦等）

（参考2）ウクライナの輸出量の推移（月毎）（2022年3月～2024年3月）



出典：現地調査会社調べ

注：その他はひまわり油・大麦など。

## 1 ウクライナ：臨時回廊からの輸出が増加

前年7月の「黒海穀物イニシアティブ」の停止後、ウクライナは、ルーマニアとの国境に面したドナウ川沿いの港からの出荷や、EU 経由の陸路等による代替輸出ルートへの拡充を試みてきた。こうした中、ロシアの攻撃がドナウ川沿いの穀物輸出施設まで及んでいるほか、鉄道の軌道幅がウクライナと EU で異なる等のインフラの制約も課題となっている。このため、ウクライナはルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する新ルートを IMO(国際海事機関)に通報し、前年8月以降「臨時回廊」の運用が開始された。

ウクライナの穀物・油糧種子の輸出に関し、「臨時回廊」を中心とした港湾からの輸出货量（一部ドナウ水路を利用したルーマニア経由の輸出含む）は、前年7～9月に毎月230万トン前後で推移していたが、その後徐々に増加し、本年2月には611万トンまで回復し、輸送手段別で8割以上を占め、シェアの拡大が進んでいる。

EU 向け輸出については、4月8日、欧州議会と欧州理事会は、EU へのウクライナ産農産物に対する関税の一時停止（2022年6月に導入）を、2025年6月まで延長するとともに、EU への輸入量が2021年下半年から2023年までの平均水準を超えた場合には関税を再賦課するセーフガード措置を認める暫定合意に達した。セーフガードの対象品目は、鶏肉、卵、砂糖、オーツ麦、ひき割り穀物、とうもろこし及び蜂蜜。

ポーランド、スロバキア及びハンガリーでは農業団体やトラック運転手の反発が強く、前年11月6日以降、国境検問所の封鎖等の抗議活動が断続的に行われており、ポーランドでは現在でも検問所の国境封鎖が続いている。一方、ウクライナ農業政策食糧省によれば、ウクライナとスロバキアは、農産物の貿易問題について5月に協議することで合意した。

※黒海穀物イニシアティブ停止後、代替輸出ルートとして、以下に掲げるものが実施又は検討。

- 1 臨時回廊 ウクライナのオデーサ港など黒海港湾から、ルーマニア・ブルガリア沖経由で輸出
- 2 トラックや鉄道輸送、ドナウ川の運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港経由で輸出  
⇒ルーマニアのブカレストからウクライナ国境まで高速道路建設中。  
コンスタンツァ港で従来施設を改修しウクライナ産農産物専用ふ頭の運用が3月以降予定。
- 3 ポーランドを経由し、バルト海沿いのグダニスク港、ラトビアのリガ港等経由で輸出  
⇒グダニスク港をウクライナ産穀物の輸出向け港湾として整備することに合意。
- 4 クロアチアを経由し、アドリア海から輸出



(出典：France Agrimer 他より)

## 2 中東：紅海における船舶航行の安全確保が困難なため回避

イスラエルとハマスの戦闘が継続する中、報道等によれば、2023年12月以降、イエメンの親イラン武装組織フーシ派が、地中海とインド洋をスエズ運河経由で結ぶ紅海を航行する商船を攻撃しており、運送各社は貨物輸送をアフリカ喜望峰経由等に迂回させている。また、パナマ運河については、降雨不足による水位低下に伴う通航制限が継続しているが、2024年4月15日、パナマ運河庁は、3月中旬以降のまとまった降雨により水不足が一定程度緩和したことを受け、16日から通行枠を増加すると表明した。5月7～15日には1日24隻、同16日からは31隻、6月1日には32隻と順次制限を緩和する予定である。

我が国の穀物輸入に関し、小麦は主に米国・カナダ太平洋岸及び豪州から輸入しており、上記2つのルートを通過しない。また、ブラジル産穀物等の多くを喜望峰経由で輸入している。

一方、米国産のとうもろこし及び大豆は、通常、メキシコ湾（ガルフ）からパナマ運河経由で輸入している場合が多い中、最近のパナマ運河の水位低下により地中海→スエズ運河→紅海→インド洋経由のルートを選択したケースもあったが、最近の中東情勢を受け、再度、喜望峰や米国西海岸（PNW）経由に切り替えざる得なかったとみられる。喜望峰経由の場合、ガルフからパナマ運河経由で輸入する場合と比較して2週間から3週間程度日数が嵩む。また、喜望峰経由のルートは、航海中の気温が上下することによる品質悪化がリスクとなっている。米国西海岸（PNW）の港からとうもろこしを積み込む動きも一部に見られる。引き続き、今後の動向について注視が必要である。



### 3 米国：とうもろこしの作付面積が減少し、大豆の作付面積が増加

米国農務省は3月28日に作付意向面積報告を公表した。本報告は、米国農務省が3月上旬に農家に対し作付意向を調査し、取りまとめたものである。

2024年のとうもろこしの作付意向面積は、前年より4.9%減少し3千600万ヘクタールとなる見込み。イリノイ州、アイオワ州等中西部の主産地で軒並み減少がみられ、48州のうち38州で前年から減少又は横ばいと予想される。

一方、大豆は、前年より3.5%増加し、3千500万ヘクタールとなる見込み。29州のうち24州で前年から増加又は横ばいと予想される。2023/24年度は米国産とうもろこしが史上最高の豊作となった一方、大豆が減産となったことから、現在の相場は大豆に優位であり、とうもろこしから大豆に作付けがシフトしていると見られる。

小麦については、前年より4.2%減少し、1千900万ヘクタールとなる見込み。米国の小麦作付の7割を占める冬小麦の作付面積が、市場価格の低下を受け7%減少し、1千400万ヘクタールとなったことが大きく影響した。デュラムを除く春小麦は前年より1%増加し、460万ヘクタールとなる見込み。デュラム小麦は前年より21%増加し、82万ヘクタールとなる見込み。これは、米国産デュラム小麦の価格がフランス産やカナダ産の価格に比べ高い水準であることが要因とみられる。

### 4 南アフリカ：エルニーニョの影響によりとうもろこしの生産量は減少

南アフリカは世界第11位のとうもろこし生産国である。我が国との関係では、南アフリカから日本へ輸出される農林水産物の第1位がとうもろこしとなっている。

米国農務省「世界農業生産(2024.4.11)」によれば、南アフリカの2023/24年度のとうもろこし生産量は1,400万トンの見込み。前月から150万トン下方修正され、前年から310万トンの減少となった。これは5年平均より10%低い水準。収穫面積は300万ヘクタールの見込みで、前年から2%増加した。単収は4.67トン/ヘクタールの見込みで、前月比10%減、前年比20%減、5年平均12%減となった。単収が平年より低いのは、エルニーニョによる乾燥と、2月と3月上旬に襲った熱波により、登熟期の初期段階にあった作物の作柄が悪化したためである。

また、2023/24年度の大豆生産量は182万トンの見込み。前月から30万トン下方修正され、前年度から90万トンの減少となった。これは5年平均より2%低い水準。作付面積は過去最高の115万ヘクタールの見込みで、ほぼ前年並みとなった。単収は1.58トン/ヘクタールの見込みで、前月比17%減、前年比34%減、5年平均25%減となった。単収が平年より大幅に低いのは、とうもろこし同様、エルニーニョ及び2月の熱波により着莢期の初期段階にあった作物の作柄が悪化したためである。

南アフリカの大豆作付面積は過去20年間で100万ヘクタール近く増加している。これは、生産者が大豆をとうもろこしとの輪作作物として利用することの利点に気づいたことや、改良された大豆品種が同国の気候条件の下で適応し始めたことによる。さらに、近年では大豆加工工場も増加しているが、食肉需要の増加に伴う大豆かすの需要増により投資家の建設意欲が高まったためである。また、本来、エルニーニョによる干ばつが予想される場合、乾燥に強いヒマワリ種子の作付けを増やすのが一般的だが、ヒマワリ種子より大豆の方が価格的に有利であることから、生産者は大豆の作付けを増やす傾向にある。

なお、米国農務省「PS&D」によれば、2023/24年度のとうもろこし輸出量は、生産量の減少に伴い前年度より150万トン減少し、200万トンとなる見込み。大豆輸出量は、前年度より49万トン減少し、15万トンとなる見込み。

## II 2024年4月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、3月末、200ドル/トン台前半で推移。4月に入り、黒海地域の緊迫化による供給不安等から、200ドル/トン台後半に値を上げた。その後、米国の期末在庫が上方修正されたことや主要生産地の降雨予報等により値を下げ、4月中旬現在、190ドル/トン台後半で推移。

とうもろこしは、3月末、170ドル/トン台半ばで推移。4月に入り、米中西部での生産に適した天候が今春の作付け拡大につながるの見通しから、160ドル/トン台後半まで下落。その後、米国の堅調な輸出検証高を受けて170ドル/トン台前半まで上昇したものの、米国農務省の穀物需給報告での期末在庫量が市場予想を上回ったことから下落し、4月中旬現在、160ドル/トン台後半で推移。

コメは、3月末、610ドル/トン台半ばで推移。4月に入り、乾季米の市場への流入が続いていることから、一時590ドル/トン台後半まで値を下げたものの、インドネシア政府が30万トンの入札を公示したことから等から値を上げ、4月上旬現在、610ドル/トン台前半で推移。

大豆は、3月末、430ドル/トン台後半で推移。4月に入り、南米産の供給増を受けた季節的な米国輸出需要の鈍化から430ドル/トン台前半に下落。その後、原油上昇や米国の好調な週間輸出成約高を受けて上昇したものの、原油下落やブラジル産との輸出競争懸念から下落し、4月中旬現在、420ドル/トン台前半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、コメはタイ国家貿易委員会価格

## III 2023/24年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度より2.1%増の28.08億トン。消費量は、前年度より1.9%増の28.14億トンとなり、3年連続で生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫量は前年度より減少し、期末在庫率は前年度を下回り27.5%となる見込み（資料2参照）。

生産量は、前年度より、小麦で減少も、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.08億トンの見込み。

消費量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.14億トンの見込み。

貿易量は、前年度より、小麦、コメで減少も、とうもろこしで増加し、穀物全体で増加し、5.08億トンの見込み。

期末在庫量は、7.75億トンと前年度より減少、期末在庫率は、前年度より減少する見込み。

(注：数値は4月のUSDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

## IV 2023/24年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り6.59億トン。消費量は前年度を上回り6.43億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率は前年度を上回る20.3%となる見込み。

(注：数値は4月のUSDA「Oilseeds: World Markets and Trade」による)

## V 今月の注目情報: 米国とブラジルの輸出競争

2023/24年度のブラジルの生産量は、エルニーニョの影響によりとうもろこし、大豆ともに減少した。一方、米国の生産量は、大豆は減少となったものの、とうもろこしは過去最高を記録した。ブラジルは、大豆は世界第1位の輸出国の座を維持したが、とうもろこしは米国にその座を譲った。両国の生産・輸出等をめぐる動向に加え、輸入先の多角化を図る中国の輸入動向と併せまとめた。

注：文中の「2023/24年度」等は穀物年度で、ブラジルのとうもろこしは2024年3月から2024年2月、大豆は2023年10月から2024年9月。米国のとうもろこし及び大豆は2023年9月から2024年8月。国や作物によって異なる(品目別需給編 P.27 参照)。

### 1 ブラジルのとうもろこし・大豆の生産・輸出動向

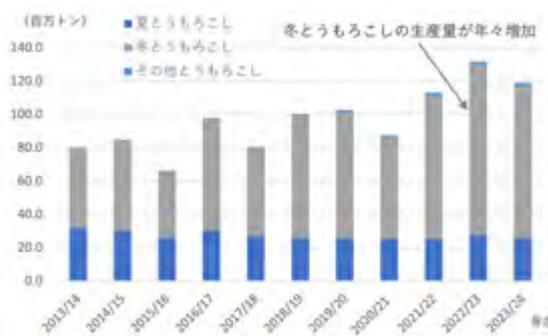
#### (1) 生産動向

ブラジル穀物供給公社（CONAB）の穀物レポート（2024.4.11）によれば、2023/24年度のとうもろこしの生産量は1億1,096万トンと、前年度より15.9%減少する見込み。これは、大豆と比べ収益性が低いとうもろこしの収穫面積が前年度より8.5%減少することに加え、エルニーニョ現象による異常気象により、生育初期に南部での多雨、中西部での高温乾燥といった悪条件に見舞われ、単収が前年度より8.1%低下したことによる。

現在、夏とうもろこしは、収穫作業が進展しており、4月8日時点の収穫進捗率は51%（前年同期48%）。冬とうもろこしは、大豆収穫後の2月以降に作付けが開始され、4月8日時点の作付進捗率は99.5%（前年同期93%）とほぼ終了した。冬とうもろこしの最大生産州である中西部のマトグロッソ州等では、作物は順調に生育している。一方、マトグロッソ・ド・スル州及びパラナ州の一部地域では、3月の降雨不足により作柄の悪化が懸念されている。

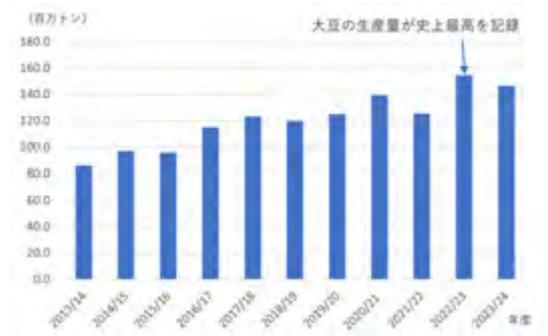
2023/24年度の大豆の生産量は1億4,652万トンと、前年度より5.2%減少する見込み。これは、とうもろこしから大豆に作付けがシフトしたことにより収穫面積が前年度より2.6%増加したものの、主産地の中西部等でエルニーニョ現象による降雨不足や高温などにより単収が前年度より7.7%減少したことによる。現在、すべての産地で収穫作業が進展している。4月8日時点の収穫進捗率は76.4%（前年同期75%）。最大産地のマトグロッソ州では97.8%とほぼ終了した。

図1 ブラジルのとうもろこし生産量の推移



出典：Conab 穀物レポート（2024.4.11）による

図2 ブラジルの大豆生産量の推移



出典：Conab 穀物レポート（2024.4.11）による

## (2) 輸出動向

米国農務省（USDA）によれば、ブラジルは、2022/23 年度、とうもろこし輸出量が 5,426 万トンと、米国を抜き世界第 1 位の輸出国となった。作付面積の増加及び天候に恵まれたことから過去最高の豊作となったことに加え、乾燥の影響を受けた米国及びアルゼンチンの減産や、ロシアの侵攻を受けたウクライナの輸出の制約などが要因となった。一転、ブラジルの 2023/24 年度のとうもろこし輸出量は 5,200 万トンと、前年度から 4.2%減少し、米国に次ぐ世界第 2 位の輸出国に後退する見込み。米国とアルゼンチンの豊作を背景に国際市場での供給量が増加すること等が要因とみられる。

大豆については、ブラジルは 2012/13 年度以降、世界第 1 位の輸出国である。2023/24 年度の大豆輸出量は 1 億 300 万トンと、前年度より減産するにも関わらず、高い価格競争力と中国向けの輸出増から過去最高を記録し、引き続き世界第 1 位の座を維持する見通し。

## 2 米国のとうもろこし・大豆の生産・輸出動向

### (1) 生産動向

USDA の 4 月需給見通しによれば、米国の 2023/24 年度のとうもろこしの生産量は、前年度より 12.4%増加し過去最高の 3 億 8,969 万トンとなった。これは、天候に恵まれたことを受け過去最高の単収となったことに加え、肥料価格の下落等を受け、大豆等と比べ肥料投入量の多いとうもろこしへ作付けが回帰し、収穫面積が 9.9%増加したことが背景にあるとみられる。

2024/25 年度のとうもろこしの生産量は、USDA が農業アウトルックフォーラムにて公表した資料（2024 年 2 月）によれば、作付面積は 3,683 万ヘクタールに減少するものの、単収が 11.36 トン/ヘクタールと前年度より上昇することから、生産量は 3 億 8,203 万トンと前年度より減少するも、史上第 3 位に相当する高水準となる見通し。

現在、2024/25 年度のとうもろこしの作付作業が始まっている。主産地の中西部では全般的に作付けに好ましい天候に恵まれている。USDA 「Crop progress (2024.4.15)」によれば、主産地 18 州の作付進捗率は 6%。過去 5 年平均（5%）とほぼ同水準となっている。

2023/24 年度の大豆の生産量は、前年度より 2.5%減少し 1 億 1,334 万トンとなった。天候に恵まれ単収が上昇したものの、肥料価格の下落に伴い、とうもろこし等へ作付けがシフトし、収穫面積が 4.4%減少したことが要因とみられる。

図 3 米国・ブラジルのとうもろこし輸出量の推移



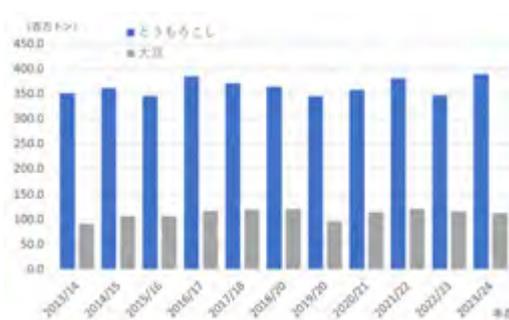
出典：米国農務省「PS&D」(2024.4) による

図 4 米国・ブラジルの大豆輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2024.4) による

図 5 米国のとうもろこし・大豆生産量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2024.4) による

2024/25 年度の生産量は、農業アウトックフォーラムによれば、過去最高の1億 2,261 万トンとなる見通し。作付面積は 3,541 万ヘクタールと前年より増加し、単収も 3.50 トン/ヘクタールと前年度より上昇することによる。USDA 「Crop progress」 (2024.4.15) によれば、主産地 18 州の作付進捗率は 3%。過去 5 年平均 (1%) を上回っている。

## (2) 輸出動向

USDA によれば、米国の 2023/24 年度のとうもろこしの輸出量は 5,334 万トンと、不作だった前年度より生産量が大きく増加することから、前年度より 26.4%増加する見込み。前年度にブラジルに譲った輸出国世界第 1 位の座を奪還する見通しである。

2023/24 年度の大豆の輸出量は 4,627 万トンと、とうもろこしへの作付けシフトに伴う生産量の減少に加え、ジェット燃料等のバイオ燃料需要の増加により国内需要量が過去最高となる見通しを受け、前年度より 14.6%減少する見込み。2012/13 年度に輸出国世界第 1 位の座をブラジルに譲り渡して以来、米国とブラジルとの輸出量の差は年々拡大しており、2023/24 年度では、ブラジルの輸出量は米国の 2 倍以上となっている。

## 3 中国の輸入動向と米国の価格競争力

### (1) 輸入動向

USDA によれば、中国のとうもろこしの輸入量は、2009/10 年度以降 100 万トンから 750 万トンの範囲で推移。こうした中、豚肉生産が増加した 2020/21 年度以降、急激に増加し、直近 4 年間は 2,000 万トン前後で推移。世界第 1 位のとうもろこし輸入国となった。

中国は、従来から主に米国産及びウクライナ産とうもろこしを輸入してきたが、2022 年 2 月のロシアによるウクライナ侵攻を受け、同年 11 月からブラジル産の輸入を開始した。中国海関統計によれば、2023 年のブラジルからのとうもろこし輸入量は 1,281 万トン。米国からの輸入量 714 万トンを大きく引き離し、ブラジルが第 1 位の輸入先国となっている。

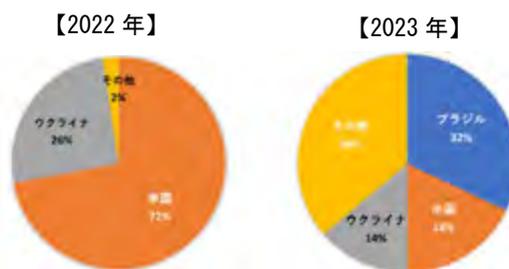
また、中国の大豆の輸入量は、2000 年以降 2017/18 年度まで概ね右肩上がり増加してきた。2018/19 年度はアフリカ豚熱発生の影響、2021/22 年度は新型コロナによる景気低迷により、輸入需要が一時減退したものの、その後豚肉生産の回復に伴い、直近 5 年間の大豆輸入量は 1 億トン前後で推移している。2023/24 年度の輸入量は 1 億 500 万トンとほぼ前年並みとなっている。このうち、中国海関統計によれば、2023 年のブラジルからの大豆輸入量は 6,993 万トン。米国からの輸入量 2,374 万トンを大きく引き離し、ブラジルが第 1 位の輸入先国となっている。

図 6 中国の主要穀物・大豆輸入量の推移



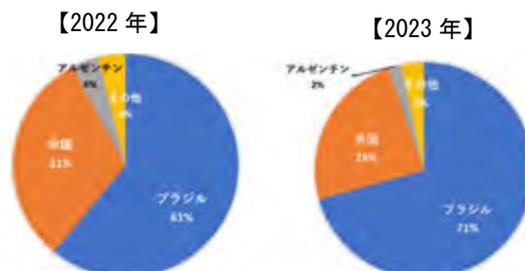
出典：米国農務省「PS&D」(2024.4) による

図 7 中国のとうもろこしの国別輸入シェア



出典：中国海関統計

図 8 中国の大豆の国別輸入シェア



出典：中国海関統計

中国は、米中対立の深刻化や、ロシアのウクライナ侵攻による食料価格の高騰を背景に、穀物の国内生産を拡大し、食料の輸入依存の増加に歯止めをかけ、輸入先国を多角化する政策を進めている。大豆輸入についても現在、米国からブラジルに大きくシフトしており、全輸入量の半分以上をブラジルから輸入している。とうもろこし輸入については、ロシアのウクライナ侵攻により不安定化したウクライナの代替として、2023年、ブラジルや南アフリカから輸入している。

## (2) 米国の価格競争力

とうもろこしについては、2023年3月以降、2023/24年産が史上最高の豊作となったブラジル産の供給増に伴い価格が低下傾向であることに加え、2023年11月以降は同じく2023/24年産が史上最高となった米国産の流入に伴い、とうもろこし価格は低下傾向で推移している。

USDA「Grain: World Markets and Trade」(2024.4.11)によれば、4月8日現在、とうもろこしの輸出価格(FOB)は、米国産193ドル/トンに対してブラジル産は199ドル/トンと、米国産が相対的に安価となっている。一般的に、米国産とうもろこしの輸出の最盛期を迎える11月以降は米国産の価格が優位となり、ブラジル産冬トウモロコシ(輸出の大部分を占める)の輸出の最盛期を迎える6月以降はブラジル産の価格が優位となる傾向にある。

また、USDA「Oilseeds: World Markets and Trade」(2024.4.11)によれば、4月5日現在、大豆の輸出価格は、米国産457ドル/トン、ブラジル産433ドル/トンと、ブラジル産の価格競争力が高い状況。

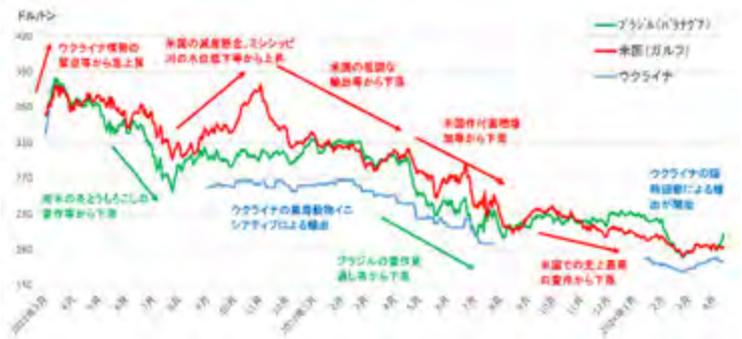
ブラジル産大豆は収穫期の終盤に差し掛かっており、現在、輸出の最盛期となっていることも一因とみられるものの、1月以降、2023/24年産のブラジル産大豆が、史上最高を記録した前年度に引き続き豊作となったことに加え、2023/24年産の米国産大豆の収穫面積が減少したことにより、ブラジル産が価格競争力を有する状況が続いている。

なお、為替のドル高傾向も米国産の輸出に不利に働いている。米ドルは昨年末より対ブラジルレアルで上昇基調で推移しており、4月下旬時点で1ドル=5.2レアル前後と、前年末と比較し6%ほどドル高・レアル安の水準で推移している。

## 4 まとめ

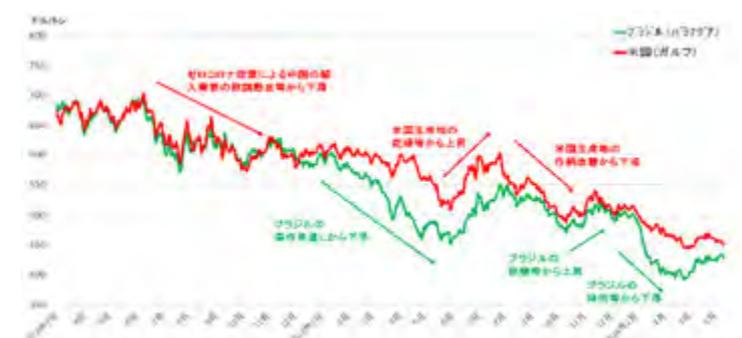
とうもろこし及び大豆の主要輸出国であるブラジル、米国、アルゼンチン、ウクライナ等においては、2023/24年度の生産が概ね豊作基調の中、米国とブラジルは激しい価格競争を繰り広げている。

図9 とうもろこしの輸出価格(FOB)の推移



出典：IGCのデータを元に農林水産省にて作成

図10 大豆の輸出価格(FOB)の推移



出典：IGCのデータを元に農林水産省にて作成

2023/24 年度のブラジル産とうもろこし・大豆は、史上最高の生産量を記録した昨年度より生産量が減少するものの、2年連続で高水準の生産量を維持しており、価格競争力を有している。一方、2023/24 年度の米国産とうもろこしは、過去最高の豊作となり、ブラジル産と同程度の価格水準となっているものの、米国産大豆は収穫面積の減少に伴い、ブラジル産と比較して割高な輸出価格が続いている状況であり、為替のドル高傾向は米国産の輸出に不利に働いている。

また、海運の面でも、米国産とうもろこし及び大豆は、前年8月以降、主要な輸出航路であるパナマ運河で降雨不足による水位低下に伴い通航制限が実施されていることから、喜望峰経由等に迂回せざるを得ない状況となっており、航行日数の増加による海上輸送コストの上昇が米国産輸出の足かせとなっている。一方、ブラジル産は従前より主に喜望峰経由でアジア向けに輸出されており、輸送コストの影響は軽微とみられる。

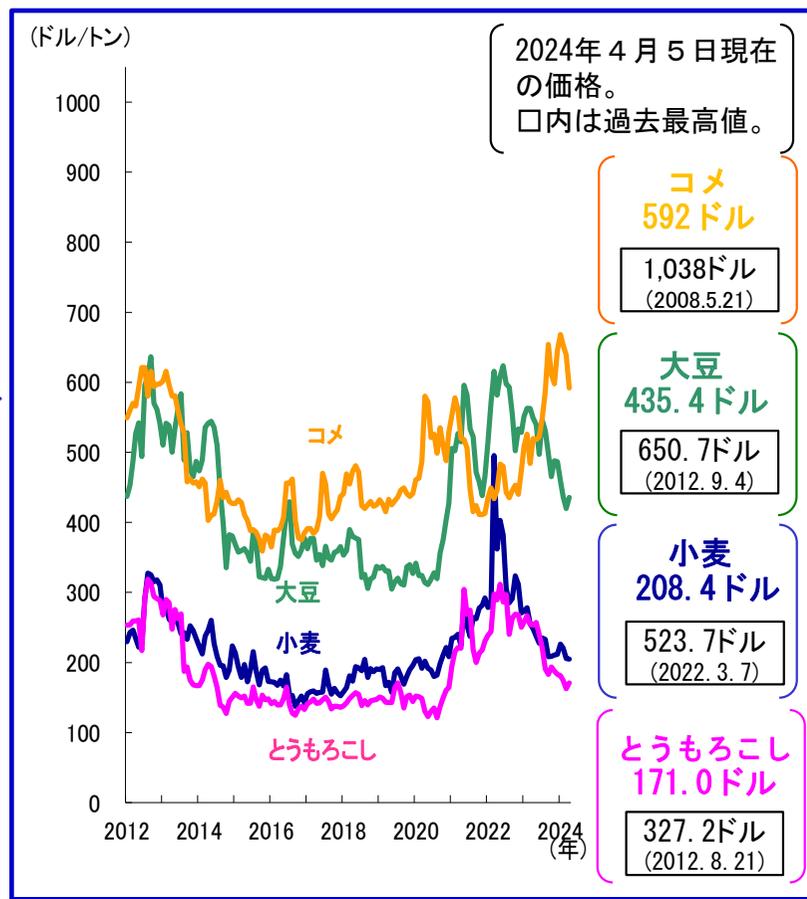
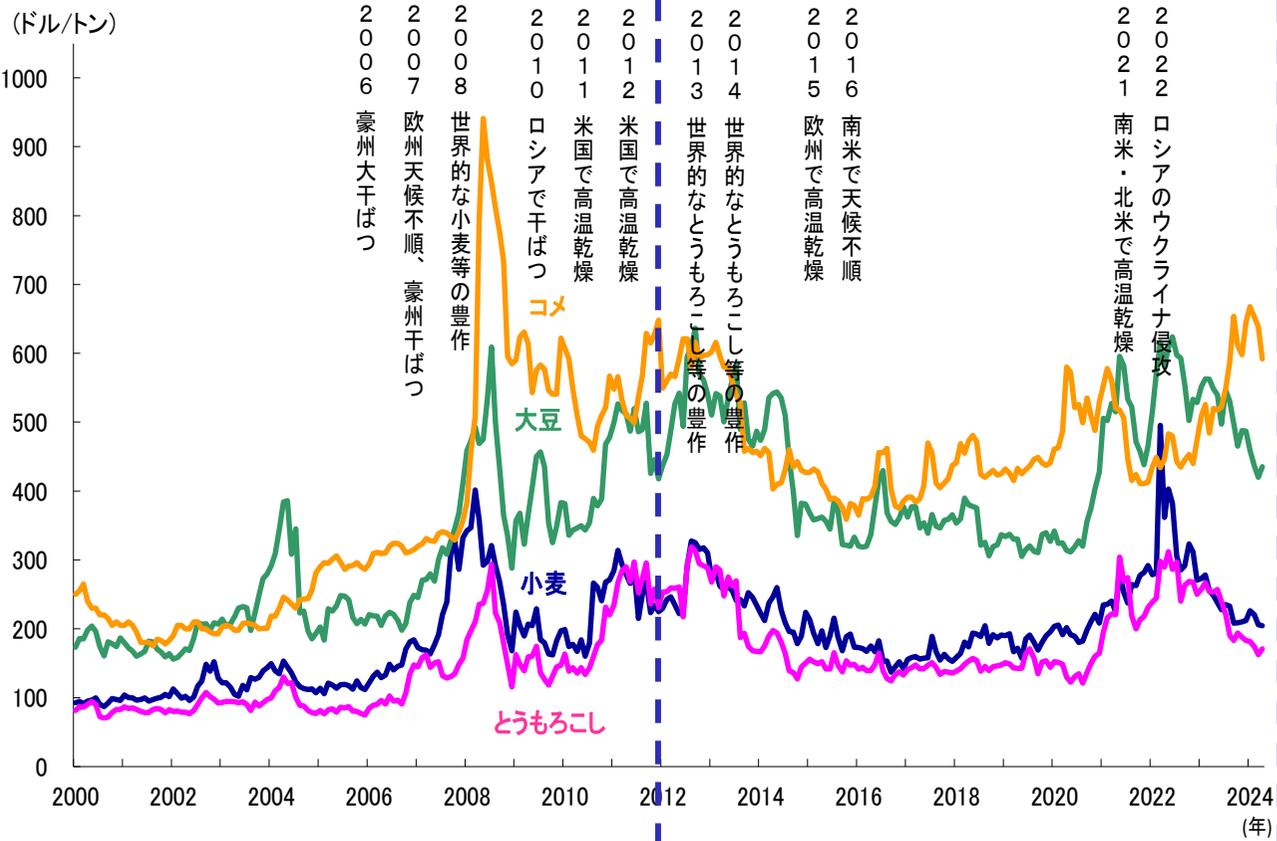
さらに、中国は、食料安全保障重視へ舵を切っており、穀物の国内生産の拡大を目指すとともに、輸入先国の多角化を進めている。とうもろこし、大豆については、米国産から安価なブラジル産に輸入をシフトしている。

このように、米国にとって種々厳しい競争環境が続いているが、4月中旬以降は、パナマ運河の水位上昇により通行枠が順次増加していく見通しがあり、また、2024/25 年産の米国作付意向面積調査の結果によれば、大豆の作付面積が増加するとみられており、今後の天候次第ではあるものの、大豆が増産となった場合、米国が価格競争力を一定程度取り戻す可能性も考えられる。2024/25 年度も米国及びブラジルの生産・輸出動向から目が離せない。

# 資料 1 穀物等の国際価格の動向 (ドル/トン)

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、4者協議による黒海からの一時的な輸出再開などもあり侵攻前の水準まで低下。一方で、とうもろこし、大豆はウクライナ侵攻時の高騰から低下も、南米の乾燥等から侵攻前と比較し依然として高水準。コメは、2013年以降低下で推移も、2022年9月以降、インドの輸出規制導入と強化、インドネシアのエルニーニョによる減産を受けた需要増等から上昇。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

## □ 穀物等の国際価格の動向

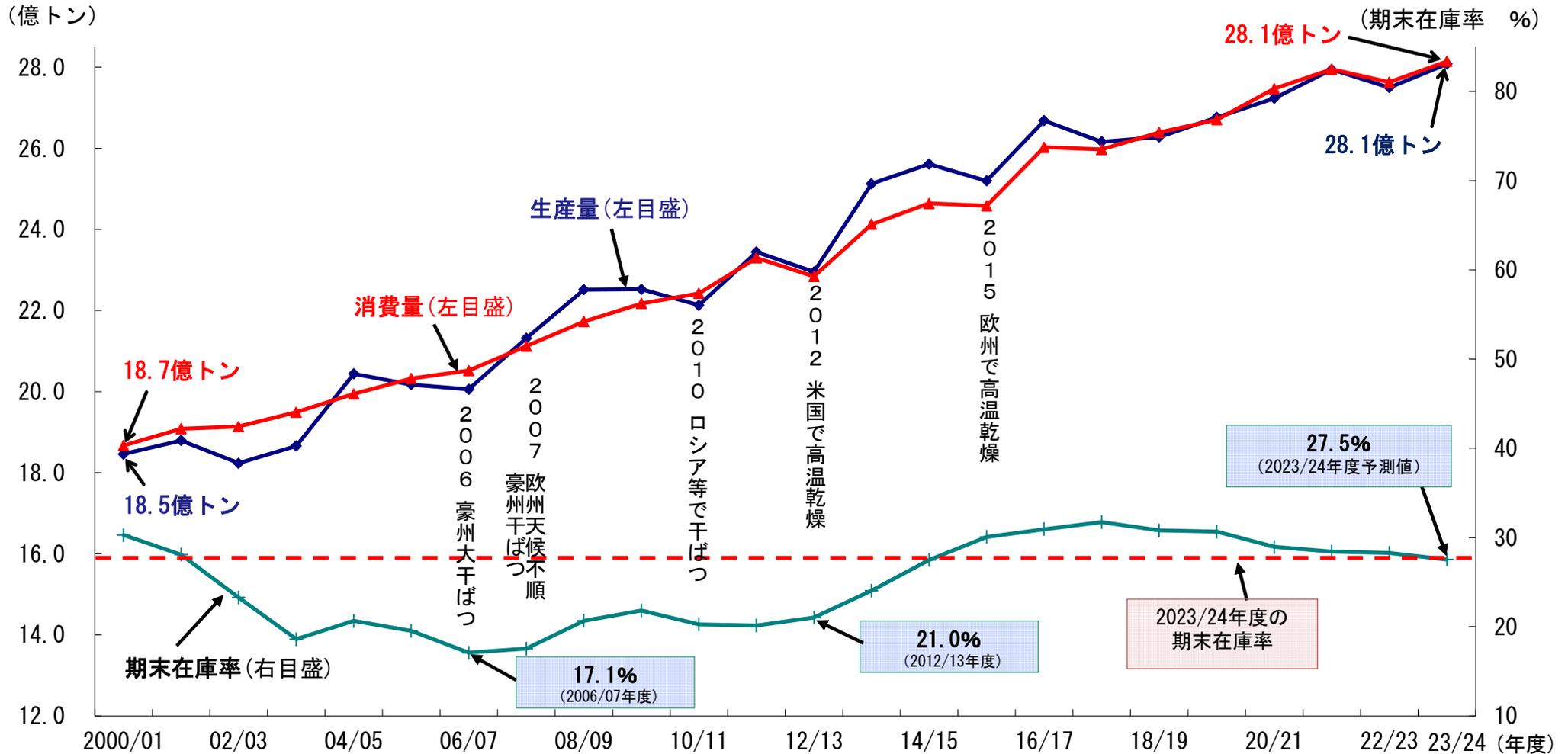


注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格(セトルメント)である。コムは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。  
 注2：過去最高価格については、コムはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コム以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

## 資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2023/24年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2023/24年度の期末在庫率は、消費量が生産量を上回り、前年度より減少し、27.5%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

### □ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

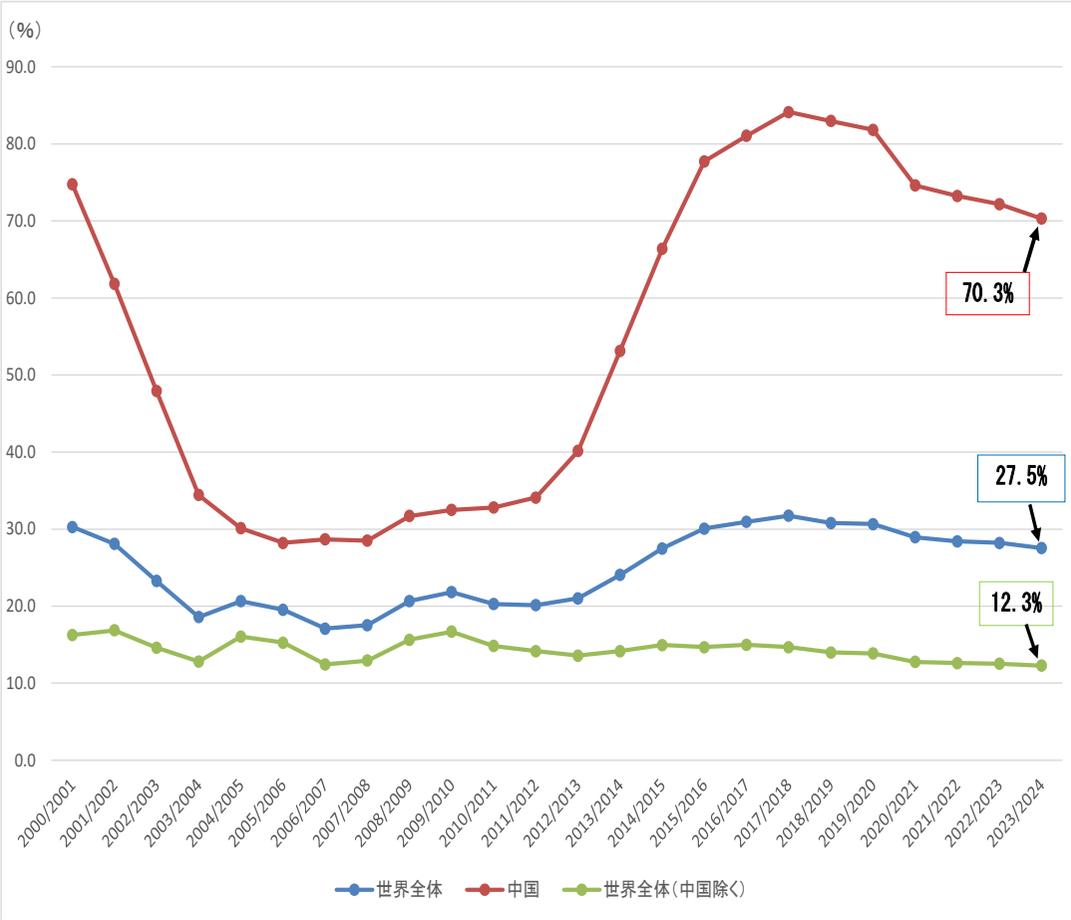


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(April 2024)、「PS&D」

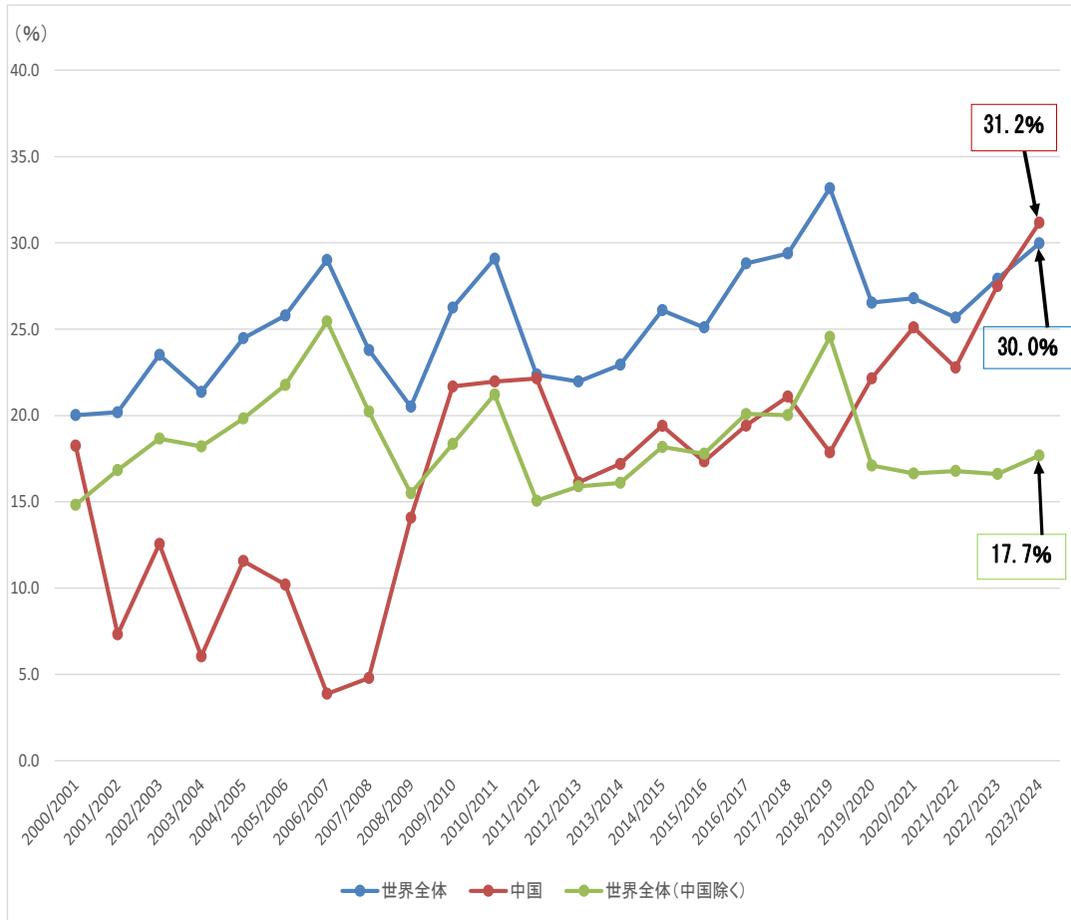
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

# 資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(April 11, 2024)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

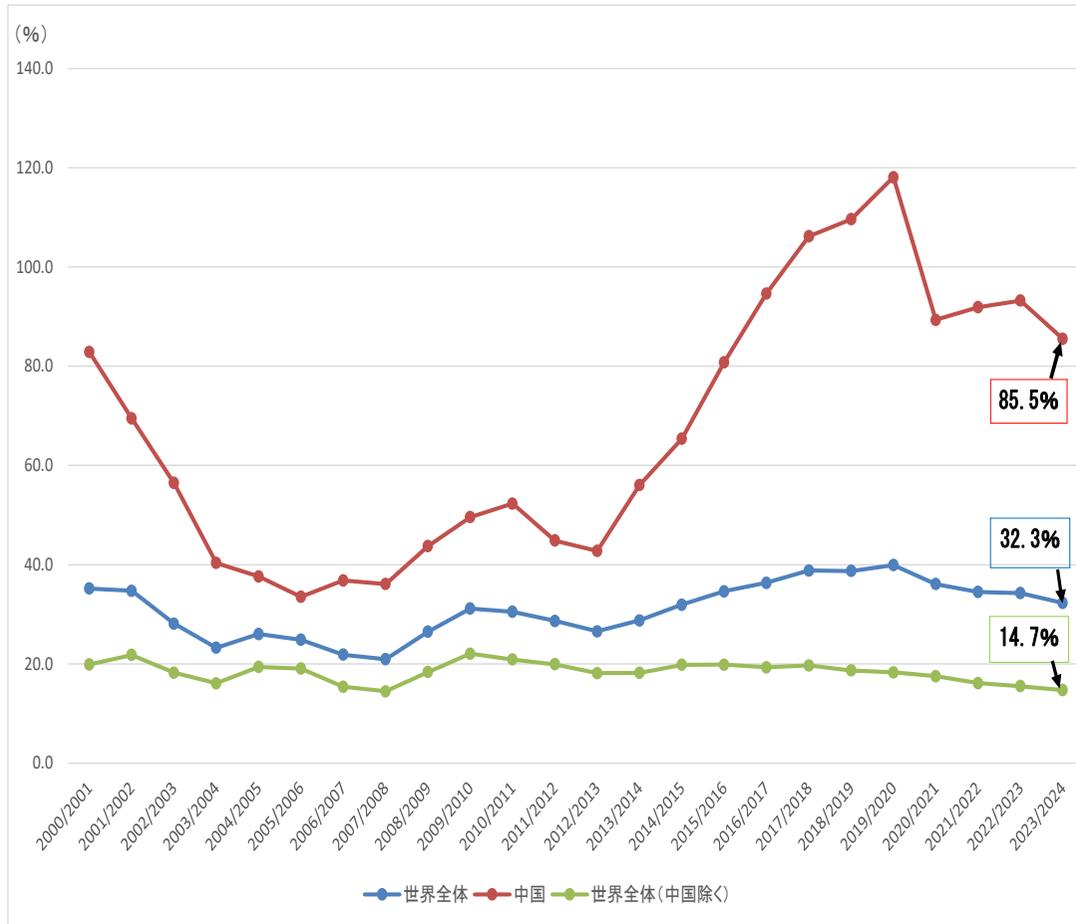
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

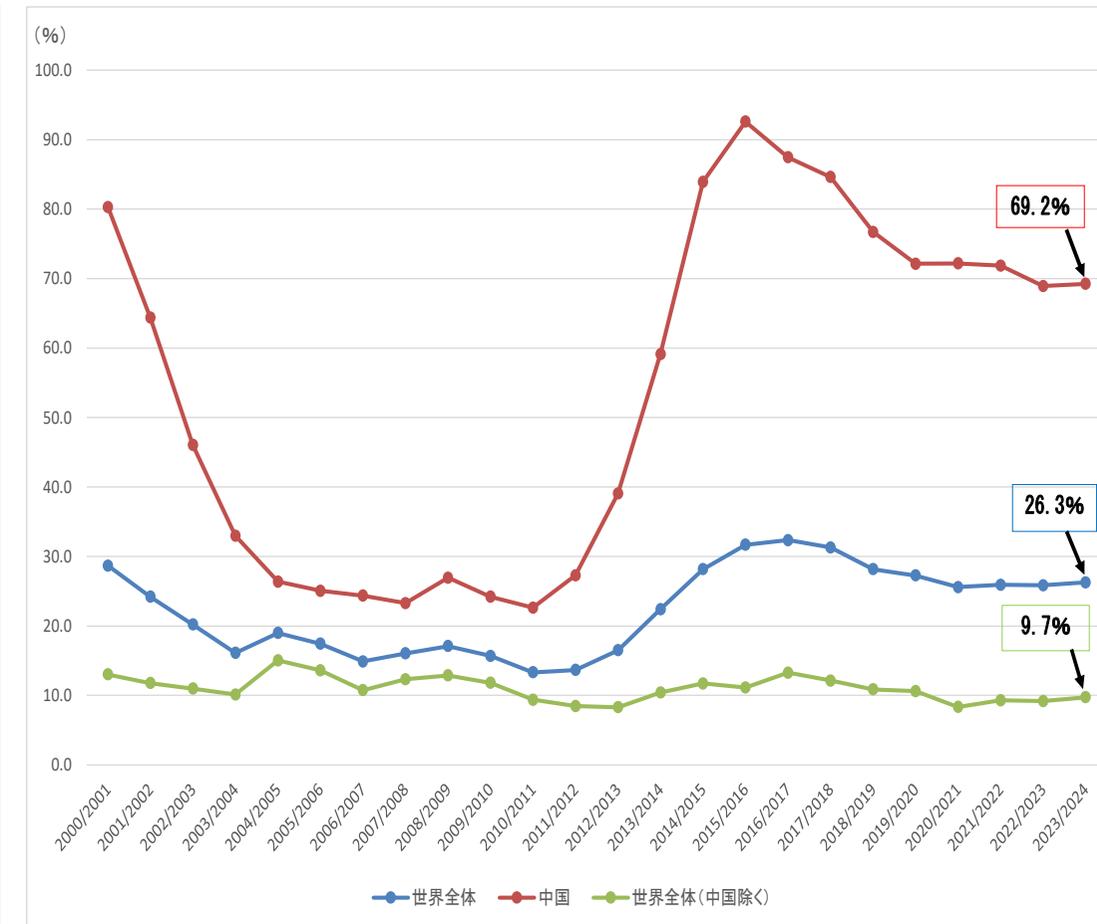
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

# 資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

## ○ 小麦の期末在庫率の推移



## ○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(April 11, 2024)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

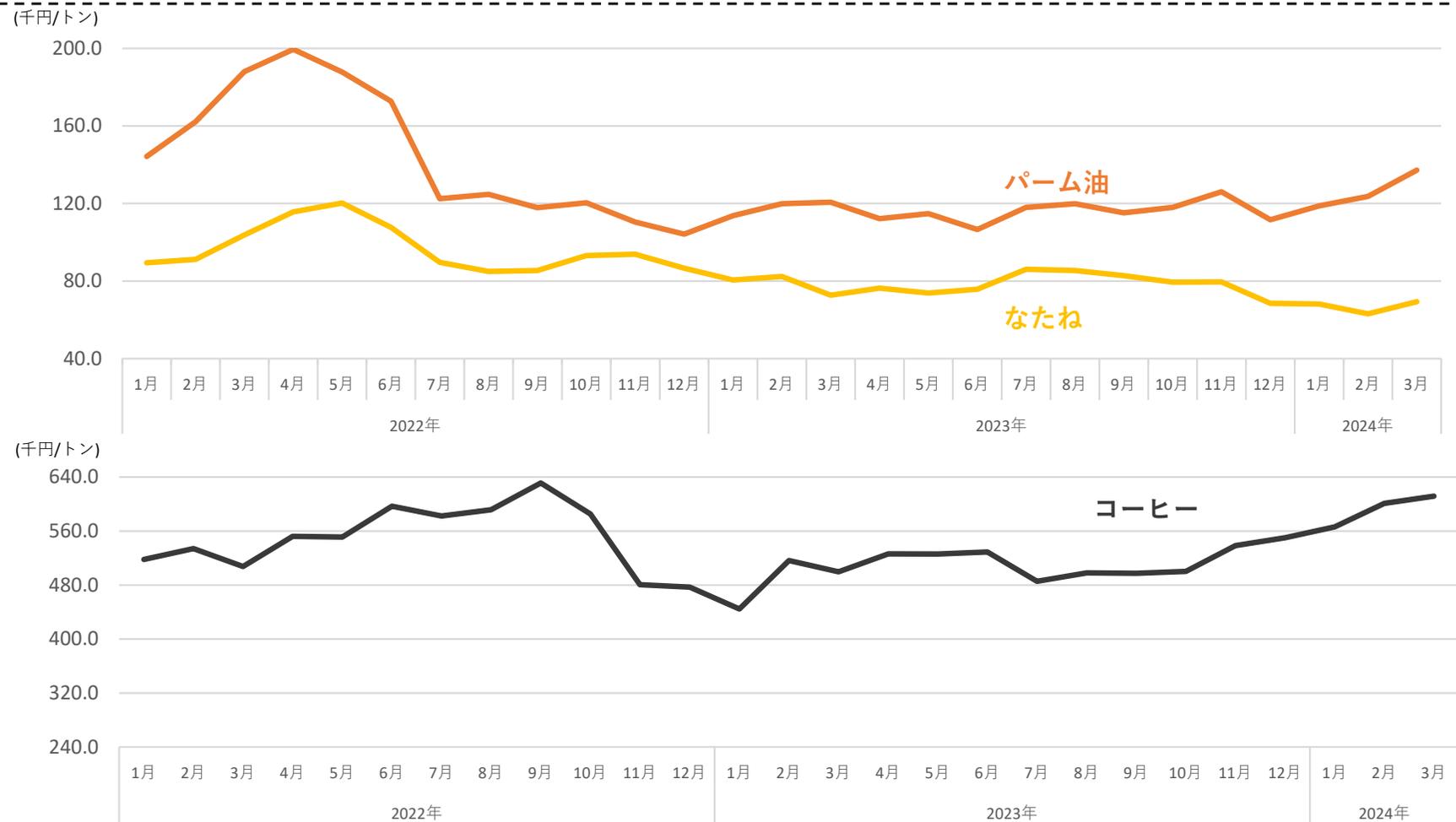
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

# 資料4-1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油の需要の面では、世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などにより市場価格上昇の要因となっている。
- なたね、パーム油の供給の面では、なたねについては、2021年に主産地であるカナダで減産があったが、2022年以降は回復基調から平年並みの収量に近づいた。パーム油については、インドネシアの輸出禁止措置（2022年5月23日解除）があったが、マレーシアの生産量の増加によって供給不足の懸念が払拭された。いずれも2022年の高値からは落ち着きが見られるものの、依然高止まりしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面では、従来はアメリカやヨーロッパが消費の中心であったが、近年は中国やインドといった人口の多い国での消費の拡大等により、コーヒー消費量が増加したことを受け市場価格が上昇した。その後、消費地のインフレによる景況感の悪化やブラジルでの生産の回復によって市場価格は下降したが、高値が続いている。



2024年4月22日現在  
□内は2022年1月以降の最高値。

パーム油  
137.2千円/トン  
199.5千円/トン (2022.4)

なたね  
69.4千円/トン  
120.3千円/トン (2022.5)

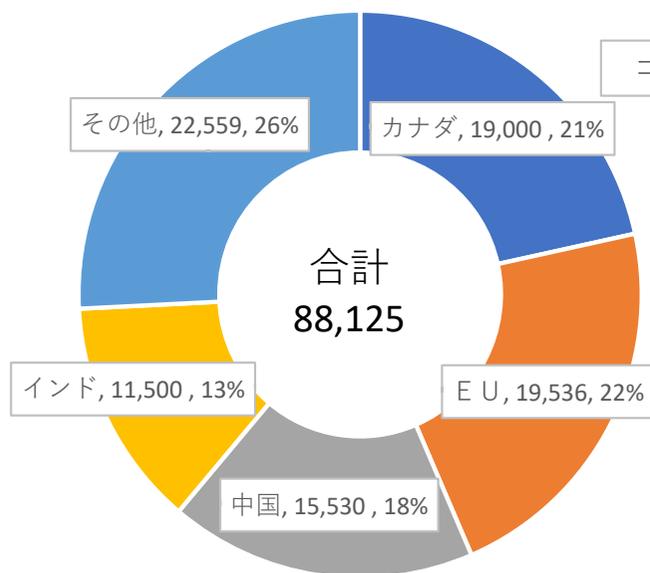
コーヒー  
611.7千円/トン  
631.1千円/トン (2022.9)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

# 資料 4 - 2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

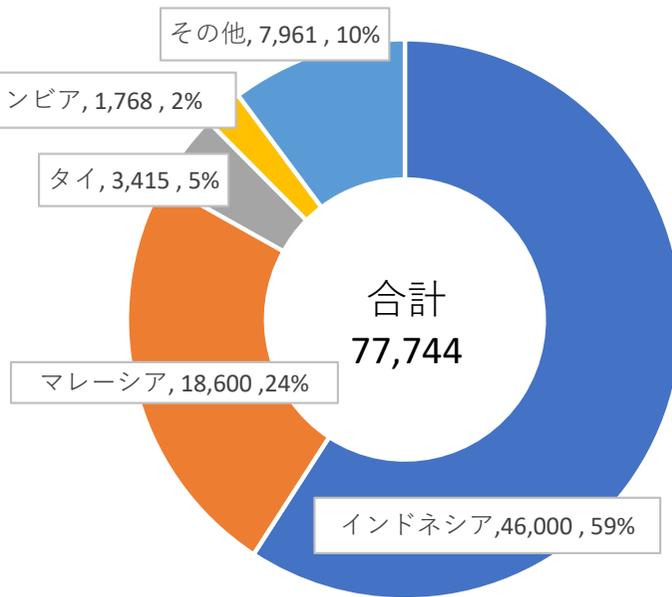
## ○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2022/23）  
（単位：千トン）



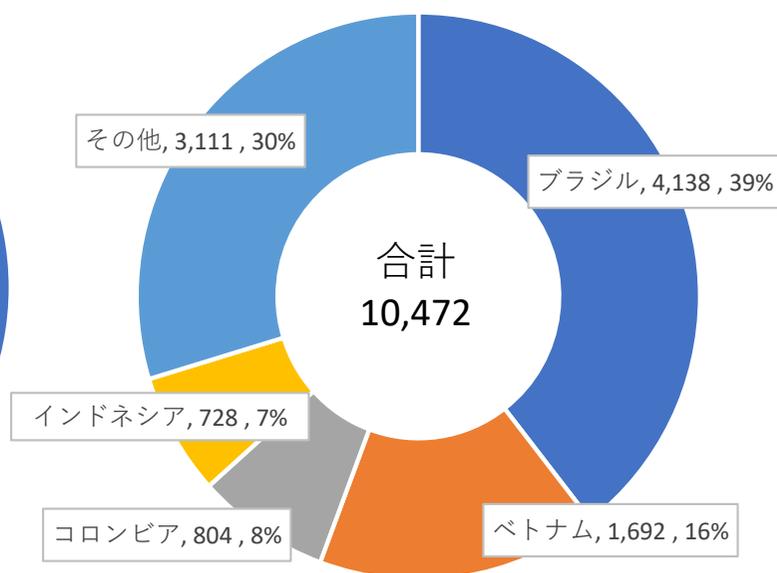
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）  
2023年6月時点

パーム油生産量（2022/23）  
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）  
2023年6月時点

コーヒー生産量（2020/21）  
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

## ○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2022年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,248	59.4%
オーストラリア	853	40.6%
その他	0	0.0%
<b>合計</b>	<b>2,101</b>	<b>100.0%</b>

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	500	78.7%
インドネシア	135	21.3%
その他	0	0.0%
<b>合計</b>	<b>635</b>	<b>100.0%</b>

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	112	28.7%
ベトナム	106	27.2%
コロンビア	47	12.1%
その他	125	32.1%
<b>合計</b>	<b>390</b>	<b>100.0%</b>

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）





# 資料5 食品小売価格の動向

○ 令和6年3月の国内の加工食品の消費者物価指数は112.9～153.4(前年同月比で-9.7%～20.1%) の範囲内。

## 消費者物価指数(総務省) (令和5年9月～令和6年3月)

消費者物価指数(総務省)

品目	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5				R6			上昇率 (前年 同月比)
	平均	平均	平均	平均	平均	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
食パン	100.2	101.1	100.0	99.2	110.3	122.5	122.7	123.2	122.7	122.1	121.8	122.1	6.8%
即席めん	95.3	98.5	100.0	100.1	107.6	123.3	125.7	122.9	122.2	122.2	125.2	123.9	9.5%
豆腐	98.8	99.1	100.0	101.3	105.3	116.3	117.2	117.0	117.2	116.9	117.5	117.6	5.0%
食用油 (キャノーラ油)	101.5	100.9	100.0	106.9	144.4	157.7	156.6	154.8	153.2	152.8	151.3	148.3	-9.7%
みそ	97.4	99.1	100.0	99.3	101.3	108.8	110.8	111.4	111.0	111.5	112.6	112.9	6.0%
マヨネーズ	100.8	100.7	100.0	105.6	125.6	154.7	154.2	153.9	154.7	153.5	154.2	153.4	10.3%
チーズ	100.9	101.3	100.0	98.7	107.5	135.0	135.2	135.0	131.3	133.0	132.7	134.5	10.3%
バター	99.5	99.9	100.0	99.9	99.2	111.5	111.6	111.3	115.5	119.0	119.1	118.8	20.1%
生鮮食品を 除く食料	97.9	99.0	100.0	100.2	104.1	114.3	114.8	115.2	115.1	115.0	115.1	115.3	4.6%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

資料: 総務省消費者物価指数

## 【参考】 食品価格動向調査(農林水産省) (令和5年9月～令和6年3月)

品目	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5				R6			上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
	平均	平均	平均	平均	平均	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
食パン	97.9	101.3	100.0	98.6	107.8	118.2	118.0	117.1	118.6	117.6	117.4	118.6	1.0%	6.6%
即席めん	92.4	97.9	100.0	99.2	105.6	121.6	122.2	122.2	121.6	119.8	121.0	121.0	0.0%	9.4%
豆腐	100.1	100.9	100.0	100.6	103.7	114.1	114.6	114.1	114.6	114.6	114.6	115.0	0.3%	4.4%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	103.5	100.0	104.1	140.7	158.7	156.8	155.5	153.3	153.3	151.4	150.5	-0.6%	-7.0%
みそ	96.6	100.4	100.0	99.2	100.1	105.6	109.4	110.0	110.6	110.2	110.4	110.2	-0.2%	6.4%
マヨネーズ	97.9	103.1	100.0	102.2	117.7	144.1	144.8	143.7	143.7	144.1	144.4	143.4	-0.7%	10.1%
チーズ	98.6	100.9	100.0	98.1	105.7	130.7	130.3	130.7	122.3	125.8	128.8	129.8	0.8%	10.1%
バター	99.0	99.5	100.0	99.8	99.1	110.7	111.4	110.5	115.0	118.3	118.5	118.5	0.0%	20.4%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

## 資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2024年5月号（4月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

### 『月報 畜産の情報』

#### ◆牛肉

（米国）24年1月の牛肉輸入量は過去最高

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003212.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003212.html)

（カナダ）23年の牛肉輸出量は前年比2.4%減、24年も減少見込み

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003213.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003213.html)

（豪州）24年2月の牛肉輸出、日本が最大の輸出先

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003214.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003214.html)

（ウルグアイ）23年の牛と畜頭数、牛肉輸出量ともに2年連続の減少

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003215.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003215.html)

#### ◆豚肉

（EU）23年の豚肉生産量は過去10年で最低、枝肉価格は高値で推移

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003216.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003216.html)

## 資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

### ◆牛乳・乳製品

（米国）乳価上昇、飼料費下落で、酪農マージンは拡大

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003218.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003218.html)

（EU）24年2月の生乳取引価格、5カ月ぶりに前月を下回る

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003219.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003219.html)

（NZ）24年2月の生乳生産量、乳製品輸出量ともに前年同月を上回る

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003220.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003220.html)

（中国）生乳価格はさらに下落、乳製品輸入量も引き続き低迷

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003221.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003221.html)

### ◆飼料穀物

（世界：トウモロコシ）主要国トウモロコシ生産量は据え置き、輸出増で期末在庫は微減も高水準維持

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003222.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003222.html)

（世界：大豆）消費や輸出の増加から世界の大豆期末在庫は下方修正も、引き続き高い水準

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003223.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003223.html)

（米国）米国のトウモロコシ生産量、輸出量などは据え置き、生産者価格は下方修正

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003224.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003224.html)

（ブラジル）23/24年度トウモロコシ、大豆ともに生産予測を下方修正

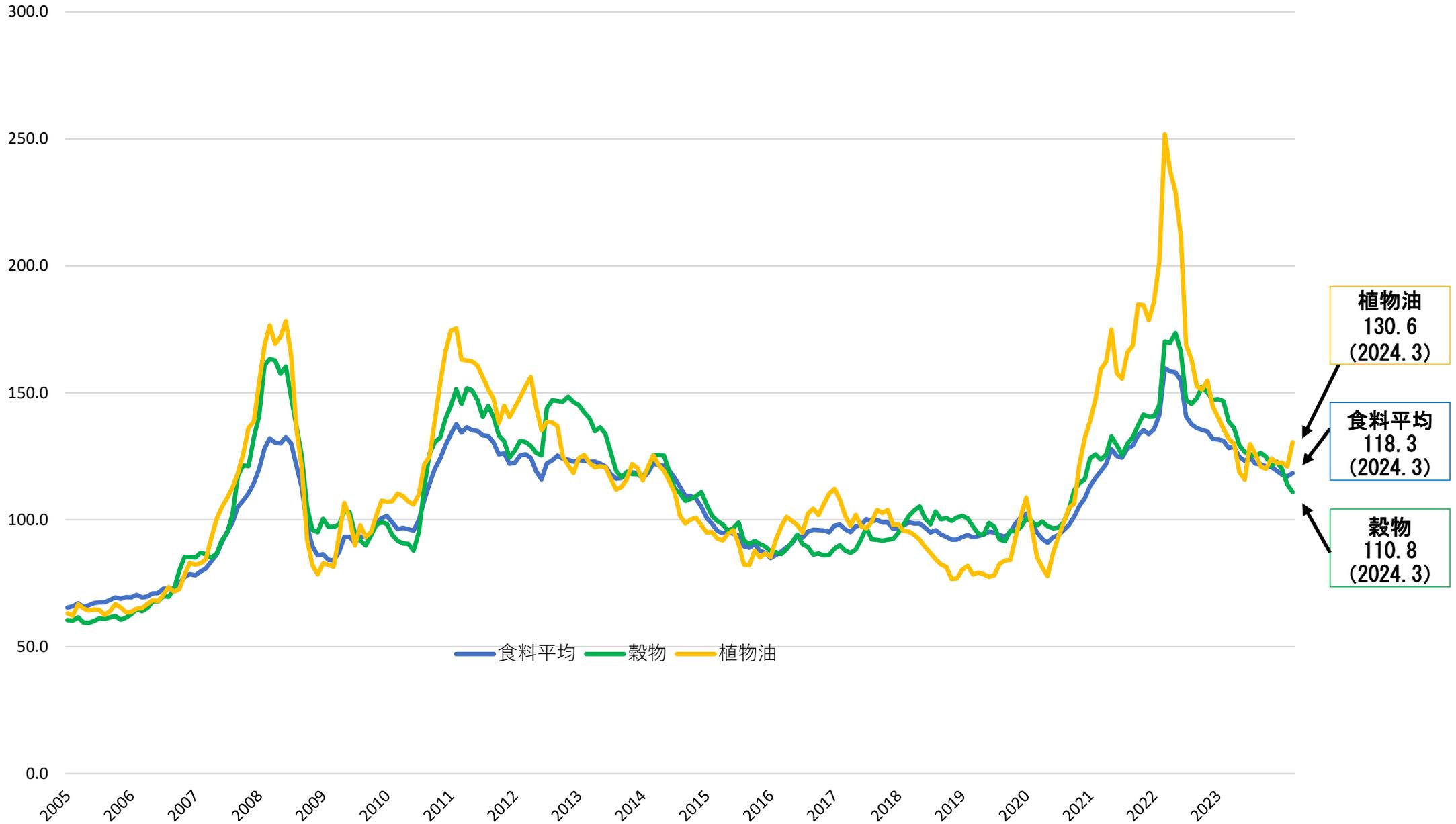
[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003225.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003225.html)

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003226.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003226.html)

# 資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2024.3)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

## 【今月のコラム】

### ブラジル便り②：ブラジルの輸送インフラ

ブラジルは、コーヒー豆や砂糖の世界有数の生産・輸出国です。最近では、大豆・とうもろこしも世界第1位の輸出国となっており、我が国も輸入しています。

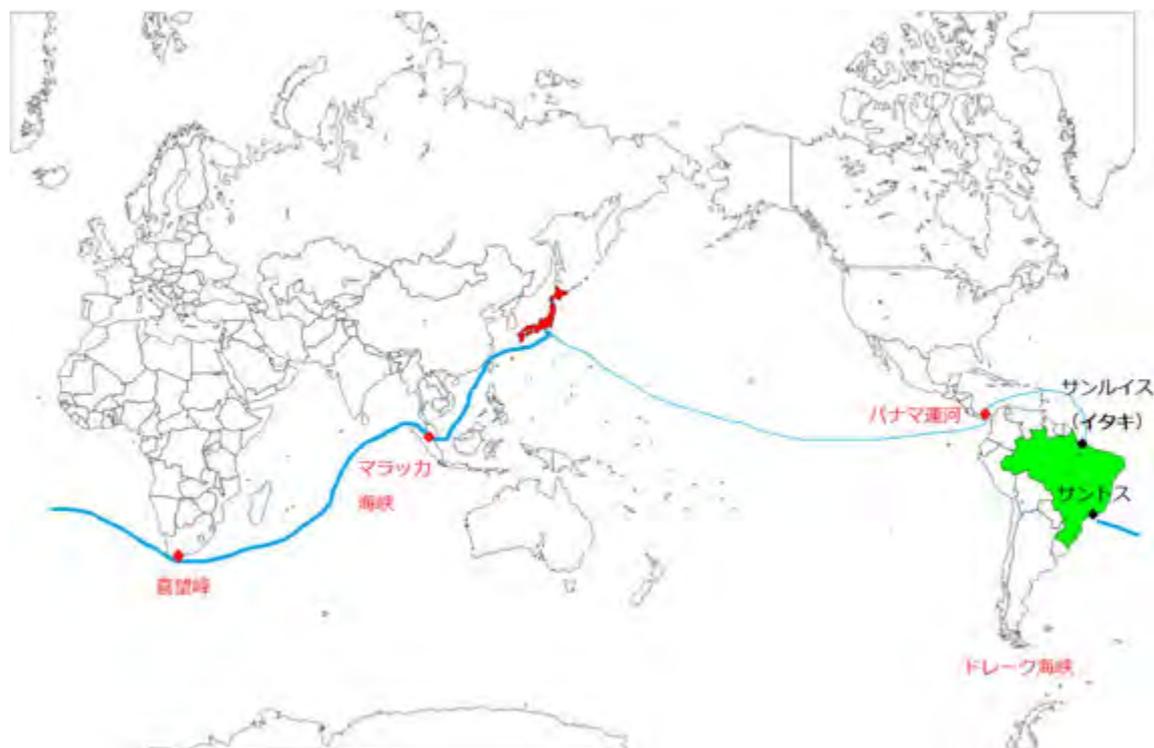
ブラジル産の大豆やとうもろこしは、どのような経路で日本に届くのでしょうか？今月は、ブラジル産の大豆・とうもろこしがどこを辿って日本に届くのかみていきます。

#### 1. ブラジル産穀物等の海上輸送ルート

ブラジル産大豆・とうもろこしのアジア向けの海上輸送は、主に南部のサントス港からアフリカ南端の喜望峰を経由するルートです。喜望峰を通過した後、東南アジアのマラッカ海峡も経由します。なお、数量は少ないものの、北部のサンルイス港（イタキ港）からパナマ運河経由で輸出されるケースもあります。

なお、南米大陸南端のホーン岬と南極大陸を隔てるドレーク海峡は、世界で最も荒れる海域の1つであり、海上輸送にはほとんど利用されていません。ドレーク海峡を含む南緯60度付近は、陸地が全く存在せず、年間を通して温帯低気圧の通り道となっており、強風や海流が遮られないため、いつも荒れており、“shrieking sixties”（絶叫する60度）と呼ばれています。

図1 ブラジル産穀物等の海上輸送ルート



注：おおよそのルートであり実際とは異なる場合がある。

## 2. 主要輸出港（サントス港）

ブラジル最大の穀物輸出港であるサントス港を昨年11月に訪問したところ、収穫された冬とうもろこしが貯蔵されていました。訪問した港湾ターミナルには穀物用倉庫が4つあり、1つの倉庫に約9万トン貯蔵可能と、かなりの貯蔵能力を誇ります。他方で、サントス港には現在54の港湾ターミナルがあるものの、拡張する余地はないようです。

一方で、中国企業COFCO（糧油グループ）がターミナルを1つ保有しており、更に既存のセルロース会社の土地を買い取ることで、2025年までにもう1つのターミナルを建築する予定となっています。

訪問したターミナルの運営会社における輸送手段の比率は、鉄道とトラックで6：4となっていました。

ある穀物商社によると、10年前まではサントス港からの穀物輸出はブラジルの穀物輸出の約45%を占めていましたが、現在は約35%まで下がりました。

これは、北部のマトピバ地域（マラニョン州、トカンチンス州、ピアウイ州、バイーア州の頭文字を取って「マトピバ」と呼ばれる）での増産に伴い、「北のアーキ」（北部のアマゾン川流域のサンタレン港やマラニョン州サンルイス港等）を経由する輸出が増加しているためです。

ただし、昨年は、エルニーニョに伴う降雨不足を受けてアマゾン川の水位が低下したため、「北のアーキ」向けの国内輸送に制約が生じ、南東部のサントス港への輸送量が増加しました。



写真1 とうもろこしの貯蔵庫

図2 ブラジルの主要な穀物輸出港



サントス港からの輸出は、一部で滞船が見られたものの、概ね問題なく輸出されているとのことでした。

### 3. 主要な国内輸送ルート

ブラジル産大豆・とうもろこしの国内輸送ルートについて、主要生産州の中西部マット・グロッソ州のシノップを例に御紹介します。

従来、シノップからの穀物の輸送はトラックが主流でした（図3の①）。シノップから、幹線道路の国道163号を利用し、約2,100km先のサントス港までトラックで輸送します。

ただし、トラック輸送では一度に大量の穀物を輸送できず、コストがかかります。

そのため、近年、アマゾン川の水運を利用した「北のアーキ」からの輸出も増加しました（図3の②）。シノップから国道163号を利用し約1,000km先のイタイツバまでトラックで輸送し、その後、約200km先のサンタレン港までアマゾン川経由で輸送します。

さらに、鉄道輸送も増加しています（図3の③）。シノップから国道163号を利用し約700km先のロンドノポリスまでトラックで輸送した後に、約1,100km先のサントス港まで鉄道で輸送します。

鉄道を利用すれば、一度に大量の穀物等の輸送が可能です。

なお、鉄道運営会社によると、中西部マット・グロッソ州とサントス港を結ぶ鉄道は、現在、マット・グロッソ州南部のロンドノポリスまで開通しており、州中部のルーカスドリオベルデまで延伸予定です。



写真2 穀物輸送用のトラック

図3 マット・グロッソ州シノップからの主な穀物等輸送ルート



写真3 サントス港に向かう鉄道貨物車

#### 4 生産地での穀物貯蔵

中西部マット・グロッソ州の生産地シノップでは、近年の急速な増産に穀物貯蔵施設の建設が追いついていませんでした。

現地の生産者によると、生産者がサイロを保有しているものの、マット・グロッソ州としては少なくとも生産量の30%は不足しているとのことでした。

貯蔵施設が不足している場合、豊作時に貯蔵し、凶作時に貯蔵施設から販売することができません。

そのため、輸入元としては、豊作時は供給量が確保されるものの、穀物輸送インフラのキャパシティの問題（例えば、サントス港の港湾キャパシティ）を注視する必要があります。

一方、凶作時は、生産地での貯蔵がなければ供給量が不足することに直結しやすくなるため、輸入国は他の国・地域に供給元を切り替える必要が生じるかもしれません。

このような生産地における貯蔵施設の不足は、日本における安定的な輸入確保の課題となります。

今回のブラジルの輸送インフラ事情の紹介は以上となります。次回、ブラジル便り③では、ブラジルの代表的料理など食文化についてお話ししたいと思います。

文責：辻 貫志（農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室）

本稿は、世界各国・地域の駐在員をはじめ、関係者の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介します。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴や考え方、また、日本の食料品や文化等に対するイメージなどについてもご紹介したいと思います。

#### 【データ・出典】

・宮路秀作（2022）、「地図でスッと頭に入る 世界の三大穀物」、昭文社



写真4 穀物サイロ



写真5 貯蔵倉庫